

無名藝術家の墓碑銘

ウジェーヌ・アンリ・ポール・ゴーギャン(Eugène Henri Paul Gauguin 1848.6.7 - 1903.5.8)。
1848 年のパリは二月革命の時代。彼の父は共和系ジャーナリストでした。一家は新政府からの弾圧を避けるため、南米ペルーに亡命。父は彼の地で急死。ペルーで数年暮らし、1855 年、帰国。ゴーギャンはオルレアン神学学校に通い、17 歳で航海士となって南米やインドに行きました。1868 年から 3 年間、海軍に入り、普仏戦争を経験し、その後、株式仲買人に転身、結婚する。1886 年からブルターニュのポン＝タヴァンで制作を開始した。株式仲買人は辞め、つまり脱サラしたのです。ポン＝タヴァンで制作していた画家は、他にもベルナールやドニなどがいて、ポン＝タヴァン派と呼ばれました。クロワソニズム(「区切る」という意味)という様式が特徴で、単純な輪郭線で区切った色面で画面構成をするスタイル。生活のためにパナマに渡り、あの有名な運河の建設現場で働くも、体を壊し、カリブ海のマルティニック島(フランス領)に渡る。1888 年、南仏アルルでフィンセント・ファン・ゴッホと共同生活を試み、「耳切り事件」をもって破綻した。ゴッホが自ら耳を切ったとされる事件ですが、剣を振りかざしたゴーギャンが耳を切ったという異説もあるらしいです。その後、ゴーギャンは一度目のタヒチ渡航をするも、貧困や病気に悩まされ、1893 年フランスに戻る。叔父の遺産で、パリにアトリエを持つも、絵は売れない。妻子とはよりを戻せるはずもなく、同棲していた女性にも逃げられ、1895 年、再びタヒチに渡航。タヒチに戻っても、貧困と病苦は相変わらず。家族との文通も絶え、死を決し、1897 年、遺書のごとき大作『我々は何處から来たのか、我々は何者か、我々は何處へ行くのか』を描く。自殺は未遂に終わる。1901 年、更なる辺鄙な土地、マルキーズ諸島へ渡り、1903 年に死去。

ポール・ゴーギャンの最高の芸術とは、彼が生前遂に無名であったことです。それは神に捧げられ、彼の死とともに消え、この地上からは永遠になくなりました。

作成者 Siveeyeah : 2013 年 10 月 5 日(土) 10:14 [[コメント](#) : 0]

